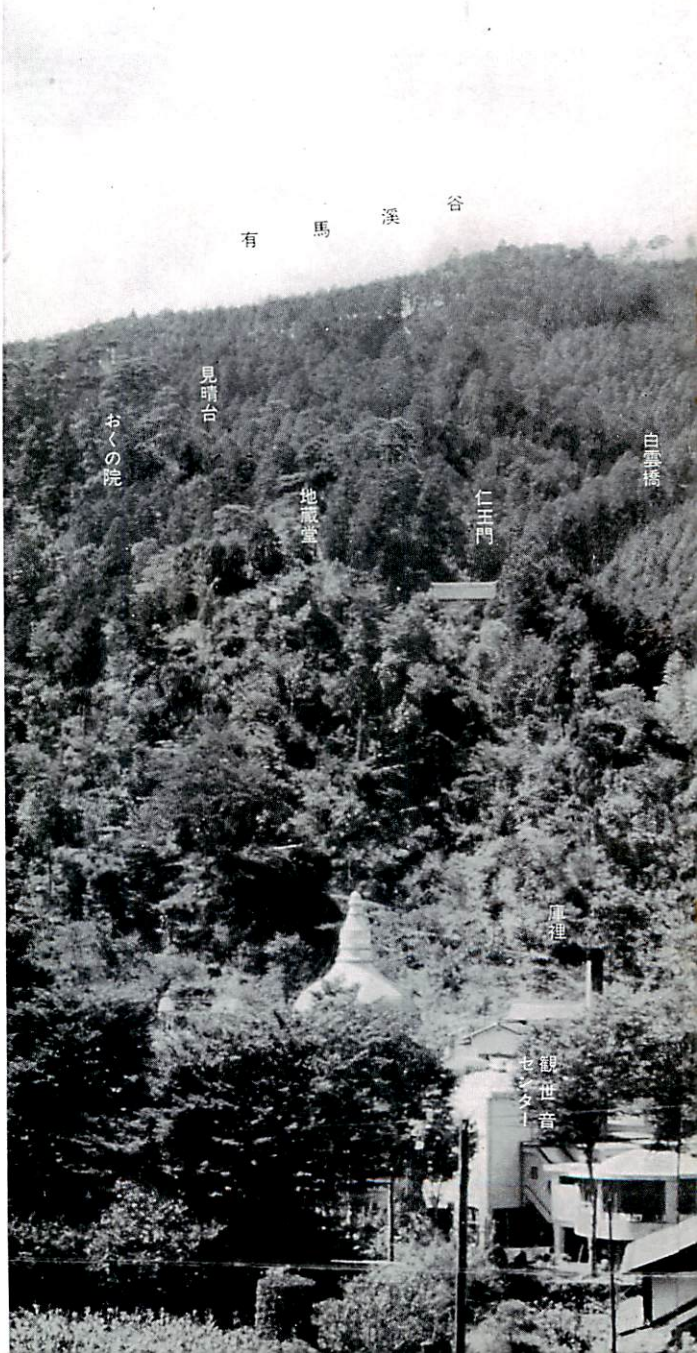
# 白雲山 鳥居観音のしおり 8

十月一日発行



# 開運大黒天尊像

木彫高1.6米（台座共）（桐江作）

十月二十一日（甲子）午前十一時より入魂式執行

# 開運大黒天奉安の主旨と由来

（桐江）

私が埼玉銀行頭取に就任して間もなく、当時所沢の神田支店長から、皆様の財宝をお預りする銀行の守り本尊にうってつけの、大黒天を彫ってくれと頼まれて彫刻したのがきっかけで、各支店からの要望も強く遂に全店に彫って上げました。

その他取り引き先や、神社等からも懇望されて差し上げたのまで合せると四百数十体になっていると思います。埼玉銀行が地方銀行中第一位の成績にのし上ったのも、この大黒天の御利益を無視することは出来ません。又お得意様との間も、各支店に結成されている大黒会を通じて大黒天の信仰のもとに、銀行と深い血の通った間柄となったことと思います。

ところが、その多くの大黒天のご本山がどこかになくては、と云われますので今回台座共で一、六米の開運大黒天を謹刻して、白雲山鳥居観音境内に奉安いたしたので、御来山の折には、何卒御参拝くださるようおねがい申し上げます。

大黒天の由来について、少し書いてみます。

大黒天と申しますと、誰でも、七福神のお一人で、肩には、大きな宝物が入った袋を背負い、右手には自由に金銀財宝を振り出す「打出の小槌」を持ち、福々しい笑顔で米俵の上に立っておられる姿を想い浮べます。この米俵は、一人三合として一年分の食糧五斗入り二俵で一生食うにこまらぬと云う意味です。

家の中心をなす柱を大黒柱と云い、お寺の奥さんを大黒と申す如く、その家をしっかりとお守りします。

そして福禄を与える偉大なお力があるので大衆に親しまれ、殊に商人からの信仰は根強いものがあります。

大黒天もまた他の仏様と同じように、その起原は印度であります。

古い印度の仏典の中に現れている摩訶迦羅（まかから）が、即ち大黒天で、大日如来の化身だと説かれていまして、仏法僧の三宝を守護し、飲食を豊饒にする神であり、又外敵を防ぐ戦斗の神として、三面六臂の憤怒の相と云う強いお姿をしておられます。当時は末開野蛮で、盗賊その他無法者の横行で不安な時代でしたから、その家を守る戦いの神として信仰されたのも当然でした。

ところが唐に渡ったころには、この戦いの神の性格が、社会の秩序が確立するに従い弱まって、飲食を加護し、福徳を授ける神としての信仰となって当時の

書には「寺院の厨房に祀られ、香華、飲食物をお供えする、するとたとえその食糧のなくなった時も、その寺院の僧侶たちのために、たちまち食物を与え給うのである。その上その家の財宝を外敵から守護しておられる」と記されています。

ですから唐の時代には、一面二臂の普通のお姿で左手に黄金の入った袋の口を握り、これを左の胸に持ち、片方の手に剣又は宝棒を持っているのが普通で、鎧を着て頭には冠をいただき、白の上に左足を組んで座り、右足は下にたらしているように変ってきています。

この中国の大黒天が、そのまま仏教の伝来と共にわが国に入ってきたのです。天台宗の伝教大師が比叡山を開山した時、地の神様にその守護を祈ったところ、その神が大黒天に姿を変えて現れ、山内三千衆徒を護らせ給うたと伝えられ、伝教大師がその有難さに随喜し、自から大黒天を謹刻してまつられました。これがわが国の最初の大黒天信仰とされております。

又九州、太宰府観音寺の大黒天は、左肩に空の袋がたれさがり、右手には小槌を持たず、腰のところで手を握りしめており、顔つきもきびしく、米俵にものっておりません。

それから盤若寺の大黒天は、三面六臂で、三つの顔はすべて怒りの相を表し、正面二本の手に剣を持ち、右手には、人間の頭髪を握りひっさげ、左の手は、羊の角をつかみ釣り上げている荒々しい姿です。

その他様々な強いお姿の大黒天の絵や像が古くから伝わっています。

しかし中国から伝わった大黒天信仰は、平和を愛する大和民族の性格からそのままの形ではうけ入れられず、古くから伝わっていた出雲神話の大国主命と同じ音であることから、この大国主命の医術、農業、縁結びの神としての信仰とが互に交り合い、神仏合体して現在も伝っている福々しい大黒天が生れたのは、鎌倉時代末期頃からです。

この神仏合体の大黒天信仰は、時代と共に盛んになり、わが国独自の福の神とし、広く一般の人々に親しまれ、徳川時代に入って七福神の一人としてなくてはならぬ民族的なものとなっています。

大黒天が使獣としてねずみを従えておられるのは、神話に大国主命が、広野で火に囲まれた時、ねずみの大群が現れて周囲の草を喰べつくして命を救ったという話からと五穀の神である大黒天が、その五穀を食べるねずみを調伏して、家来にされたと云うことから、いつもねずみがつき従っていると云うわけです。

# アラブ・地中海沿岸の旅路（其ノ三）

桐　江

## 民族の斗争

しおり第七号で、アラブとイスラエルの戦況を書きましたが、帰国後テレビ、新聞等が、ヨルダン川をはさみ、イスラエルとヨルダン（アラブ）の戦斗や、ナセル大統領がイスラエル打倒のため、アラブ諸国の団結をさけんでいる有様を聞きますと、ヨルダン国の一部の占有や、未だ開通されていないスエズ運河に対する支配権の争奪、殊に回教とユダヤ教との深刻な根強いしこりなど、実際に現地に行き皮膚で感じて来た対立する両民族の、いつ果てるともなき険悪な空気が今更のようによみがえって参ります。

世界に散らばっていた亡国の民ユダヤ人が、二千年の間神に祈りつづけてきた、祖国イスラエルを得たという異常とまでに感じられる祖国愛の強さ、又頭が良くてねばり強い人種であり殊に占領地区を徹底的に開拓している有様を見て考えますと、このイスラエルとアラブ連合の深刻な対立は世界の恒久平和に大きな暗い影を投じております。

そこに平和の光を見いだすのは、南、北ベトナム問題以上に困難かも知れません。

又ギリシヤやトルコは、共産思想の侵入に対し実に神経をとがらせておりまして、ギリシヤでは五千人の共産党員を追放したという話しを今度の旅行で聞きました。

又キプロス島のトルコ人とギリシヤ人の人種斗争、新興アフリカ諸国の独立の結果生じている人種斗争等、この地球上には至るところこの様な深刻な争ひを繰返しており、この争は、結局戦争という最後の手段にうったえざるを得ないのが現在の実状であります。

イスラエルに行きました時、そこの人が云っておりましたのは、「中国は最も恐るべき国であるという事でした、世界の五分の一近くの人口を持ち、世界各国に入り込んで、次第にその国を自国に都合の良い色に塗り変えようと努力している」と云うて居りました。

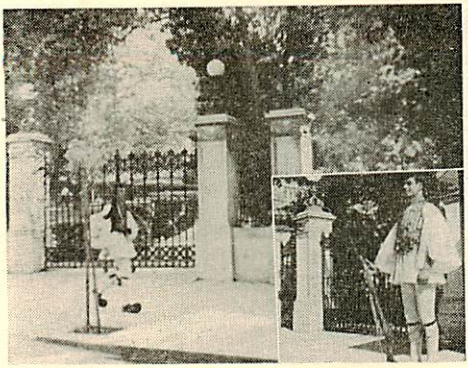
人類は如何に平和を願い、口に称えていても、その

主張を実行させる力が欠けている場合、それが何の効果もない事を考えると、日本民族は今や累卵の危うき状態にある様な気が致します。

## 首都　アテネ（ギリシヤ）

九月廿二日アテネの市内見物をしました。

森につつまれている、宮殿の正門前には、古式ゆたかに、きらびやかな、美しい服を着た、玩具の兵隊のような衛兵（左図写真）が、ロボット人形のように、三十歩ぐらいの間を行ったり来たりしているのが、アテネ名物の一つとして観光客の目をたのしませます。特にその衛兵交代の時は、見事だとのことです。

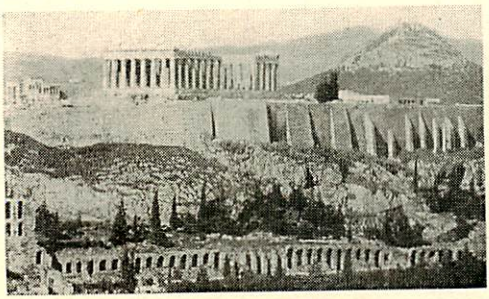


ギリシャ現王宮前の衛兵

有名な国立考古博物館や、ベナキ美術館を見学しましたが、ベナキ美術館は、一個人の力で、よくもこのように貴重なものを、沢山収集したものだと、驚くほかありません。又エレクチオンの寺院も目を見はらせる価値があるし、地下から発掘された、広大なデウスの神殿は昔時の壮観さを物語っております。ここで日本語の写真帖を売っておりますので、如何に観光に対する努力をしているかが窺われました。

## アクロポリスの神殿（ギリシヤ）

アクロポリスの大神殿（下図写真）はアテネ市の中央二百米ぐらいの岩山をおおって建てられている。紀元前三千年の古城ですが、一度ペルシヤに破壊されたのを復元したもので、総白大理石のスパルタ式の雄大な建築美には、ほれぼれしました。その左側



アクロポリス全景

には、美女六人が柱となっているエレクティオンの神殿、之は必ず写真に出て来る名高いものです。又山すそには、世界最古の劇場が二か所ありますが、丁度この古色蒼然たる劇場で、大劇団が演奏しているのを、真上から眺めることが出来ましたが、三千年前もかくやと、しのばれて、しばらくは恍惚として見とれました。

其の他パルテノン、ポセイドン、美のビーナス等の伝説の多いコリント式神殿が沢山あるのですが、その一部しか見ることが出来なかったのは心残りがします。

しかしアラブ諸国で見た、原始的な、重厚な様式と違ひ、石の色艶、感触等を生かしたスパルタ式建築美は、古代ギリシャの繁栄をしのばせます。

## コリントの古跡（ギリシャ）

午後は、**コリント**の古蹟を見物すべく、自動車で銀色のオリーブ樹の多い海岸を西に進みました。この辺のオリーブの木は数百年の古木で枝を切りつめるとみえて、瘤だらけになっており無気味な形をしているので、若し月夜にここをさまよったら、百鬼妖怪が乱舞しているような無気味さだらうと、妙な幻想を起こさせます。

海岸近くには、沢山の島が見えますが、ここはペルシャと二回にわたる古戦場で「ペルシャ王があの島の上で戦況を眺めていたのだ」とガイドが説明していました。

ペルシャ軍の戦艦は、ギリシャのより遙かに大形なのでギリシャ軍は、水陸共に戦いに破れ岩窟にのがれたギリシャ王は、或る夜「楯を磨いて鏡の様にしてあの丘で戦え」と云う神のお告げを夢みたので、その通りに全軍を、深い谷のそばに陣取らせたところ、勝ちほこったペルシャの大軍が谷の近くまで猛然と突進して来た時、何千という鏡のように光る楯を一せいに朝日に向けて反射したので、敵は目が眩み、その深い谷間に皆飛び込んでしまい、大勝を博したという伝説があります。

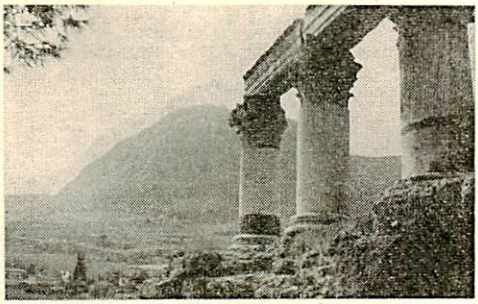
ペルシャとの第三回目の戦争は、ギリシャの東海岸で展開され遂にペルシャ軍を撃退したのですが、この海岸に**オリンピア**というところがありまして、負傷した一兵士がこのオリンピアから四十キロの道をアテネまで走って「戦い勝てり」と一言いって遂に息絶えた。

これがオリンピックにおけるマラソンの起源であるといわれています。ギリシャはこの様に外敵に備へるためスパルタ式の体育に重点をおいて指導した結果よ

く彫刻で見る様な立派な体軀の人種となりましたが智育を従としたことが欠陥だといわれています。

ローマのシーザーが金の鍬で起工式をしたという深い運河を見物して尚車をはしらせると、名高い**コリント**の古蹟に着きました。

昔ローマによって占領され破壊されたこの遺蹟は、四百年もかかって建設されたという、広大な城壁にかこまれた、ギリシヤの王宮や市街地、遊郭等の一部が地下から発掘されておりますが、その形が良く保存されているし又出土品を陳例してある集古館等で、当時の殷賑さをしのぶ事が出来ました。其の近くに、突兀として美しく聳えている高い山があり、その頂上には、当時の修道院の建物（右写真）が見えます。当時そこでは、三百余人の美女を全国から集めて特別に教育した処だとのことであるが、この美女達が一生修道院生活をしたかどうか聞きもらしましたが、ギリシヤの彫刻にはこの美女達の影響があると思ひます。



コリントの遺跡と修道院の建っている突兀とした山

## クレタ島（ギリシヤ）

二十三日飛行機で地中海の**クレタ島**に飛びました。

今度の旅行で、この海上を三回も飛行したのですが、幾百という島が群がっていて、それは全く画のような美しい眺めでした。

この島々には、古代の遺跡が多く、ビーナスが発見されたというピロス島や、最近トルコ人とギリシヤ人が斗争した、キプロス島もその中にあります。

そのうち最も大きなクレタ島の**ヘラクレオン市**の考古学博物館は、紀元前二千年前の出土品が実に時代の順序よく見事に陳列され、クレタ島の文化史をまのあたりに見る心地がしました。

殊に壺などのデザインは、うるし等で、両刃の斧とか鳥類、海草、魚類等あらゆるものが、自由奔放に画かれた筆勢には四千年前によくこれまでの芸術品が、出来たものだと驚嘆させられました。

## クノックス神殿（ギリシヤ）

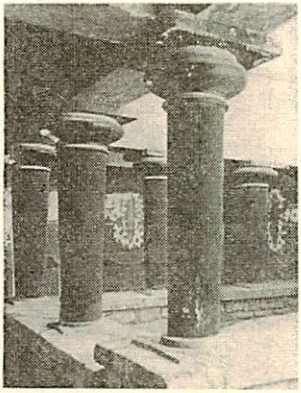
ヘラクレオン市の東方海岸に、発掘された**クノックス宮殿**があります。

今から五十年前英国人エヴァンスという考古学者が、トロイ（トルコ）の伝説の詩からトロイの遺跡が発掘された事実から、クノックス王宮の伝説も実在するであろうと信じ、八年間掘りつづけて遂にクノックス王宮の遺跡を発掘しました。

その伝説とは、クレタ島は日本の四国ぐらいの小さな島ですが、地中海の他の島々やギリシャ本土までを領土としていたので、その王ミノスは、立派な王宮に数百人の女をはべらせておりました。

ところが王姫が牡牛に恋をして半人半牛の**ミノタウロス**を産んだので、王は怒って迷路の連続している複雑極まる宮殿を造営して、その奥にミノタウロスを幽閉してしまいました。

ところがミノタウロスの強要で九年ごとに七人の子供を犠牲（いけにえ）にささげておりました。



クノックス宮殿

ギリシャの**テセウス**という青年は、内心このミノタウロスを殺そうと決意しこの犠牲を志願しました。

そしてギリシャを出発するとき、老父に「もしミノタウロスを殺して凱旋する時は、舟に白い帆をあげて帰る」と約束をしてクレタ島にわたりました。

ところがミノス王の娘**アリアドネー**は、この青年を一目見て恋をしてしまいました。そして彼女の入れ知恵でテセウス青年は、糸巻の糸を体にしばり迷路深く進入し、半人半牛の怪物ミノタウロスと戦ひ遂に之を殺し、糸をたぐって脱出することが出来ました。

そしてテセウス青年は、恋仲の王女アリアドネーを連れてクレタ島を脱出し途中ナクソス島に立ち寄った時、王女を島に忘れ又老父との約束の白い帆を挙げるのを忘れて黒い帆のまま帰国の途につきました。待ちこがれて居た老父は、海岸から之を見て息子が失敗したものと直感して悲しみのあまり海に飛び込み自殺しました。今でもその海の名を老父の名をつけて**アイゲウス**と称されております。

この息子がナクソス島に大事な恋人を忘れたり、白い帆を出すのを間違えたりしたのは、半人半牛の魔人の霊のたたりだとのことです。

この伝説は日本の古事記にある、妻がワニと密通してワニの子を産んだので、葦の家にこれを押し込め火で焼き殺そうとしたといふ、大和の三輪神社の伝説によく似ているのですが、この半人半牛の、ミノタウロスもトルコ人であったろうと云はれていますことから、古事記の伝説も漂流してきた東南亜人のではなかったでしょうか、しかしどの伝説も人の心を引きつけるために神秘的に作られているのが面白いと思います。

この様な伝説があるので、英人エヴァンスは、それとおぼしきところを八年も掘りつづけ、遂にこの神秘的な大神殿を掘り当てたのです。

この王宮は山の斜面にあるため、六階建ぐらいで他国で見たような雄大なる建築とは正反対で、廊下も狭く曲りくねった、そして昇り降りが多く部屋も小さく実に複雑極まる設計で、深く入ると一人では出る事が出来ないような迷路ばかりです。まだ一部しか発掘されていない事は、蝙蝠の姿が全く見えないのに蝙蝠のいやなにおいで胸が悪くなるほどですから、中はまだまだ深いものと思はれます。珍らしいのはこの王宮の柱は下が細い事、六尺もあるような大きな酒、油、食糧などを入れたと思はれる壺が沢山あり、流れる油を集める溝までととのっております。壁には博物館で見た様な奔放な美しい絵が沢山描かれておりますし、劇場や商店街、税関の跡など見ますと、四千年前の驚ろくべき文化の有様がしのばれます。

クレタ島は、盆栽作りの葡萄園と数百年もたったと思はれる銀色のオリーブ樹の古木と、針のように美しい糸杉で蔽われるという珍らしく美しい島です、私達は他の遺跡を見物するため八百米ぐらいの峠を登りつめましたが、そこから眺められるオリーブ等で蔽われた大平原や多くの島々等、他では味えぬ素晴らしい良さがありました。

峠に登る途中にアラブに焼き払らはれたという、あれはてた**クノックス宮殿**の遺跡があります、そして壁にある字は、左から右に読み次の行は右から左に後もどりして読むので、行を間違える心配がないとのことです。

そしてアラブ諸国の字は、画の様に面白い字で左から右に読むのとは大分違い、アルハベットもまじった楔形の字であります。

その壁面の字の意味は、金銭の事とか妻以外の女を犯した者は死刑にするなどの法律碑文だとの事だが、アラブ諸国では、石に彫りつけた文字はたいてい法律

の事が多い様です。

この峠を登りつめた眺めのよいところにクノックス宮殿にまけないプエフト王宮とか、谷間にはロイヤルビラ王宮、海岸のアヤトリヤ宮殿など発掘された遺跡を見ましたが、皆ローマ軍に破壊されたという無残な情景をしのぶことが出来ました。

この道端のところどころには収穫した山なす葡萄に、蠅ならぬ蜂が群をなしてたかっているのが印象的でした。

## イスタンブール（トルコ）

九月二十六日、トルコの首都イスタンブール（昔のコンスタンチノーブル）を見物しました。

イスタンブールは、ボスポラス海峡をへだててヨーロッパと亜細亜との接点にあることと、黒海をへだてソビエトに接しており、ソビエトが最も渇望している、不凍港の喉頸なので、トルコとしては問題のところです。

そのため西欧側には、十数粁の厳重な城壁をめぐらし、又黒海の入口近くには、ものものしい砲台が連らなっていて、ヨーロッパやロシアの侵入を喰い止めるために全力を尽くした跡がよく窺われます。

イスタンブールの人口は、三百万と云はれますが古色蒼然たる都市で、古代トルコの面影を味ふことが出来ました。又高台のホテルから眺めると金角湾をへだてた向側には、大戦艦のようなサインド・ミナレー大聖殿の四本のミナレー（大尖塔）や、ブルーモスク、其の他沢山の回教寺院が林立して画のような美しさです。

先ずサンタ・ソフィアの大寺院に行きますと、寺院の入口には実に立派な水屋があります。

回教のモスク（寺院）には、皆このような水屋の設備があって、信者は必ず手足を洗ひ、口をすすがねばならぬ掟になっております。

先ず靴を脱いで本堂に入ると、沢山の美しい壁画や床など全部が五色の石のモザイクで出来ており、実に重厚な美しさを現しているが、このモザイクはビサンチン時代（約千年前）の美術の最後のもので、其の後は五色の石を粉にして画くように変っております。

このモスクの中央大丸天井の高さは、五十六米もあるのでこの天井から床上三米位のところまで数十の大シャンデリアがたれ下っているのは、電気のない時代の照明としては止むを得なかったのだと思ひます。

回教には、仏像のようなものは全くなくただメッカ

の方に向って祭壇がもうけられているだけですが、ここにある王様の礼拝される王座の彫刻美はすばらしいものでした。

そしてメッカの方向にある祭壇に向って沢山の信者が真剣に祈っている様子は、実に神秘的で心を打つものがありました。

観光客はその信者のお祈りを乱さぬ為に、高い声を出すのを禁じられておりますので、無言でぬき足さし足で拝観させられました。又男の信者のお祈りを乱さぬ為婦人の祈るところは別に二階にあります。

又現在ユダヤ教も女人禁制をして居ります。

銅板を張った大きな丸柱に指の入る位の穴があります、之に指を入れてお祈りをすると願ひごとが叶うとの迷信で、皆これをやっているので私達も面白半分やって見ました。

ここを出て丸屋根のトルコ風呂の沢山並んでいる古い建物を左に見て進むと、雄大な**ブルー・モスク**（下図写真）があります。

回教寺院のミナレー（大尖塔）は、普通四本ですがここのは六本あります。

これは回教寺院の最高の資格があるからだとのことです。

ブルー・モスク前の一行

このブルーモスクは、モザイクの画やステンドグラスに青色が多いので、青い寺院といわれ落着いた感じがします。

その近くの古い城壁の中に入ると広大な**トプカピ宮殿**があります。そして城内の博物館の一部には、中国製なのに中国にも少ない古代の陶器の逸品が何百点もあるとの事ですが、丁度其の日は城内に入ることを許可しない日であったのを「わざわざ日本から見に来たのだ」と強引に頼んだので漸く特別に許可され見る事が出来ました。シルクロードの関係とはいえ、よくもこんなに中国陶器の逸品を集め得たものだと同行の陶磁器研究の専門の人が驚ろいておりました。

ボスポラス海峡をヘリボート（自動車ぐるみ乗せる舟）で対岸のヨーロッパ側に渡り、海岸ぞいに王宮やケマル・パシヤの大演説場、古代の城壁、砲台等の間をとおって黒海の入口まで行くと、海峡は三百五十米ぐらいにせばまっているので、阿波の鳴門のように、潮の流れが強くうずを巻いている所もありました。

黒海の入口を、又ヘリボートでアジア側に渡り**アナトリー**の砦や、**ウスクダラー**等を見物しましたが、紺碧のボスポラス海峡をはさむイスタンブールの古代の城壁、寺院、さては雑然と通る大小さまざまな船など、実に画の様に美しく、今度の旅行中最も印象の深いものがありました。

トルコは、人口約三千五百万といはれますがシルクロードの欧州に通ずる要路であるため、蒙古や十字軍其の他の国々から侵略されて、砂漠にうずもれた都市が沢山あると云はれております。

前に説べた、クレタ島のクノックスの遺跡を発掘した英人は、ドイツ人が伝説から**トロヤの遺跡**を発掘したことに自信をえたと書きましたので、トロヤの事を書いて見ます。

この伝説は、今は去る三千百年の昔**ミケーネ**（ギリシヤ）の王が、弟の絶世の美人であった妃がトロヤ（トルコ）の王子に誘拐されたのに復讐するため海を渡ってトロヤを攻めたが、堅固な城壁に守られたトロヤは、なかなか陥落せず包囲すること十年、両軍ともおびただしい犠牲が出たが最後にギリシヤ側の考えだした詭計にかかって、ギリシヤの英雄達の潜んでいる巨大な木馬を城内に引き入れてしまい、ついにトロヤは陥落してしまいました。

しかし勝ちほこったミケーネ王が凱旋すると、王妃が密かに通じていた者によって暗殺され、又その仇を報いんとした王子オレステスは自分の母を殺す等の悲劇を重ね遂に隆盛を誇ったミケーネ王朝もほろびたという伝説は、ギリシヤ悲劇うってつけの題材であります。

しかし詩人ホメーロスがうたった、三千年前のこの悲惨な物語りは十九世紀までは半信半疑でありました。ところが今から百年前、ドイツ人シューリマンが幼少のころトロヤ落城の挿絵を見て、この遺跡発掘を念願しあらゆる苦難の末、幸い商売に成功し資産を得たので狂人と罵られながら自費でトロヤの発掘を始めました。予言者的彼は、専門の考古学者の考えている場所と違った海岸よりの丘に鍬を入れて、遂に大城壁をもつ都市と、おびただしい財宝を掘り出し、つづい

て大きな円形の墓から、副葬品や純金の装身具など一〇キログラムを越す黄金が出て来て、世界を驚ろかしてホメーロスがうたったトロヤの詩はたんなる伝説や造り話しでない事が証明されたのです。

トロヤは、百年余の発掘作業により、八層である事をつきとめる事が出来まして、この不思議な「積み重なった都市」の歴史は推理小説の様に興味深いものがあります。

実に何千年の間、何度もうずもれた市街地を知ってか知らずにか、他の民族がその上に又その上にと都市を造っては消えること八層に及んだのは、地震か、戦争か、疫病か、火災或は根こそぎ奴隷に引きたてられたか、トロイは全く不思議な街であります。

今度の旅行で三層ぐらいまでの遺跡は見物しましたが、八層とは全く驚ろくほかありません、最近古跡の発掘が大流行なので、中近東やギリシャの古代の伝説が、だんだん実在となりつつある事は喜ぶべき事です。

## ギリシャの神々

**ギリシャ**の北方国境に峨峨たるマケドニヤ山脈があります。頂上は常に雲でかくれており神秘的なところに多くの神々が住んでいるといはれ、ギリシャ神話の中心をなしているとの事です。

そしてこの神々は、人間が欲する本能のままに指導するのです。

たとえば、人が人を愛さずにはおられないとすれば愛を司どる**アフロディテ神**がいる、又男女の肉体が結ばれずにはおられない時は性の神**エロス**がいる。喧嘩や戦争をしたければ不和の神**エリス**がいるなど、それぞれの神が沢山おります。

しかし、これによって生ずる色々の責任は人間そのものにあって、罪を犯したものは地獄に落ち苦しむのだ、存分に苦しむがよいというのです。

ですからこの神々は、五官、五欲を断ち切れという仏教とは正反対に見えますが、結論では似ているように思われます。

神々により、人間が本能の欲するままに行えば破滅に落ちてしまい、地獄の責苦を受けるということからこの神を恐れ、神をお祭りし、そして沢山の神殿を建てて神を祈り救を求めるようになるとのことです。

又ギリシャ人は、政治でも、経済でも、戦争でも、結婚でも、何んでも必ず科学の神**アポロ**のお告げを受けてから決断と信念を持って実行に移すとのことです。

このお告げを取り次ぐ巫女（みこ）は美人で処女であること、そしてその御神託をうける儀式は、なかなか荘厳で神秘的だとの事です。ですからこのような神々によって育まれているために、沢山のギリシャの神話や伝説が生れたのでしょう。

しかしこの神々に対する信仰は漸次減少し、現在ではギリシャ正教が多いとのことです。

次の九号には「イタリヤ」「スペイン」「フランス」の事等を書きます。

# 西遊記（其ノ三）

## 如意棒と悟空

たたかいにだいじなものは武器である。こんせい魔王からとりあげた刀はあるが、これだけでは心細い。

ごうらい国の王様の城にはほしい武器が何でもあると云うことをけらいにきいた悟空は、きんと雲をよび、王様の城へとんで行った。

空から見おろすと、はるかに武器ぐらが並んでいる、悟空は口びるをつきだして、ぷーつとふくと、たちまち大風がおこり、武器ぐらの屋根はとび、かべはくずれて、武器だけがのこった。

悟空は毛をむしって小猿にかえ、武器を一つずつもたせ、空中高くとびながら、花果山へもどってきた。

悟空は、毎日けらいの猿と武術のけいこをした。

猿ばかりでなく、島にすむおおくの怪物たちもけらいになって、益々たたかいにつよい大軍になった。

しかしそのうちに悟空のもっている武器も気にいらなくなった。もっとすばらしいものがほしくなった。

けらいから竜宮の海の竜王が、すばらしい武器をもっていると云うことをきいて、

「よし竜王にあってそれをもらってこょう。」

悟空は海岸に立ってじゅもんをとなえた。すると海が二つにわれて、一筋の平らな道となったので、そこをまつしぐらにすすんで、まもなく青い屋根、赤い柱の、竜宮についた。

竜王はすでに悟空のうわさをきいていたので、あばれ出されてはこまると思って、着物をきかえ、家来を引つれて、ていねいにでむかえた。

「これはこれは、ようこそ。」

おくの部屋に通された悟空は、大変のごちそうをぶえんりょに、たべてから、

「ときに竜王どの、この悟空によい武器があったらおゆずりねがいたいが、いかがなものでしょうな。」

竜王はそのことばをきくが早いか、家来にいいつけ

てもちださせた一本のおもそうな刀をさし出した。
悟空は、その刀を手にとり、ぽいとなげ出して、
「かるすぎる、これでは役に立たぬ。」
竜王は、こんどは、二千百キロもあるという、重い槍を持って来た。
「これもだめ、かるいかるい。」
片手でぐいとさし上げたまま悟空は首をよこにふった。
竜王はあきれて、海のそこに長くよこになっている鉄棒をゆびさして、
「これは昔、ある人が、海の水の深さをはかったと云うもので、やくに立つではないか？」
「なるほどこれはすこし手ごたえのありそうな品のようだ。」
悟空は鉄の棒をもちあげようとしたが、重さ九千キロもあって、長さが七米と云う鉄棒は、いくら何でもうごかすことはできない。
それをみて、竜王は、にっこりわらって云った。
「それは如意棒と云って、思った通りになる棒よ、長くも、又短かくも、じゅもんさえとなえれば、心のままになるのがねうちだ、これをどうだもって行っては。」

悟空は、竜王にじゅもんをおしえてもらうと、うれしくてたまらない、さつそくじゅもんをとなえ、如意棒を三センチほどにちぢめて耳の穴におしこんだ。

悟空は、尚竜王から着物とかんむりをもらって水れん洞へと引かえした。

竜王は、天上界の王である玉帝に悟空のことをくわしく知らせたので、玉帝はちえのある太白金星と云う老人にたのんで、悟空を天上へつれに水れん洞にくだらせた。

水れん洞は、おおさわぎになった、いくら、らんぼう者の悟空でも、天上の玉帝のつかいには、うかつなことはできない。そこで竜宮からもらってきたぴかぴかの着物をきて、うやうやしく太白金星をむかえた。

日頃の悟空とはちがって、おだやかなたいどで、太白金星の言葉にしたがい、悟空は、すぐに仕度をして、太白金星といつしょに天上へのぼった。

悟空は、ひつばおんという役について、千頭の天馬の世話をするのである。

もとは石から生まれたさるでも、今は天上の役人だ。

ところが、悟空が通ってもだれもあいさつする者もなく、よこをむく者ばかりである。

「さては太白金星のやつ、わしをだましたな、いや玉帝がうまいことをいって天上へつれてこさせたのだ、こうなったら孫悟空さまの力をみせるまでだ。

耳にいれておいた如意棒を、ぬきだし、じゅもんをとなえた。

如意棒は、するするとのびて、ふとい鉄棒になった。

悟空は、それをぶんぶんとふりまわしてあばれた。

さんざんあばれたうえ、きんと雲をよびよせて、水れん洞へともどってきた。

悟空は、如意棒をにぎりしめ、空をにらみつけてどなった。

「みておれ、おれはきっと斉天大聖になってみせる。」

そのあくる日、天上から、地獄の赤鬼と青鬼がやってきて、酒によってねていた悟空をしばり上げて、地獄へひつたててしまった。

門の入口で気がついた悟空は、青鬼、赤鬼を見るなり、斉天大聖の孫悟空さまだと、ここでも一あばれして、花果山へもどってきた。

悟空のうわさは、たちまち、天上にもとどき、将軍のたくとうりを大将に、玉帝の三ばんむすこのなだ太子を副将として、悟空せいばつの天兵の大軍を、花果山にさしむけた。

悟空は如意棒をふりまわしたり、にせものの悟空を

三匹つくったりして、大軍をなやました。
悟空の如意棒の一うちが、なだ太子のあたまに、大きなこぶをつくった。
なだ太子はにげて、天上へもどった、玉帝は、二どめの軍を、すいれん洞へすすめようとしたが、考え深い太白金星がそれをとめて、
「悟空はあばれ者ですが、わるい心はありません、もう少し高い位につければよろこぶにちがいありません、斉天大聖になりたくて、かつてにそう名のっているのですから。」
「なるほど、それでおとなしくなるなら、それもよかろう、すぐ下界へいって、悟空に話してくれ。」
玉帝にたのまれた太白金星はいそいで、水れん洞へおりていった。
「なんだ、金星ひとりか、天兵をおいかえした悟空さまだ、たったひとりでやってきて、どうするのだ。」
「あらそいにきたのではない。玉帝のおぼしめしだ、悟空、おまえはほんとうの斉天大聖になれたのだ、おれといっしょに天上へこい。」
太白金星がせきたてるようにいったので、悟空はうたがってもみたが、ついに金星につれられて、天上へのぼり、玉帝のところへいった、そして斉天大聖の位につくよういいわたされた。
こんどは道をあるいていると、むこうからくる者が、さきにあたまをさげて、道をゆずってとおるのに、悟空はいい気もちになった。
ある日玉帝は
「悟空、こんどおまえに、ばんとう園の番人のかしらになってもらうことにした。はたらいてくれるだろうな。」
悟空はすこし不平だったが、ばんとう園は、天上のだいじなところで、ふつうの者で、この役がつとまるものではない。ということをきいたので、
「やりましょう。悟空、骨身をおしまず、はたらきます。」
とうとうばんとう園の番人のかしらをひきうけた。

## ばんとう園の桃

ばんとう園は桃林で、よい木が三千六百本もある。しかし、ただの桃ではなかった。どの木にも、ふしぎな桃の実がなった。
入口の千二百本には三千年に一どしか実がならず、しかも、これをたべれば、仙人になれるという、ふしぎな力をもっていた。

なかほどの千二百本には、六千年に一どしか実ができず、これをたべればいつまでも年をとらず、長生きが出来るといった。

おくの千二百本は、天と地のつづくかぎり生きられると云うめずらしい桃である。

この話をきいた悟空は、感心したようにみせたが、もう仙術を知っているから、そんな桃をたべずとも、生きたいだけ生きられるわけだ。けれど、園にきてみると、気がかわってしまった。

「うまそうだな、わしは桃がすきなのをわすれていたよ。一つたべてやろう。」

悟空はからだの毛を一本ぬいて、いきをふきかけ、自分のにせものをつくって、これを散歩にだした、そしてほんものの悟空は、仙術でからだをけして、するすると桃の木にのぼった。

まず三千年に一どみのるという桃の実をとってたべてから、六千年に一どの実を一つ。つぎに九千年に一どみのるのをとってたべた。

それからは、毎日のように、にせものの悟空をさんぽにだしてやり、あとで、こっそり桃の実をとって、たべていた。

ある日玉帝のおかあさんの王母のやしきから、七人の仙女がきて、玉帝に云った。

「王母さまがお客をまねかれて、園の桃をとってこいとのことですが、よろしいでしょうか。」

「おお、とってよい、園には孫悟空がおるはずだ、ことわってからとりなさい。」

仙女たちは、すぐ園にきてみたが、悟空のすがたがみえないので、下役に話して、三千年めにみのる桃をかごに三ばいとって、六千年めにみのる桃を三ばいとって、九千年めに一どの桃の木の下にきた。

そこにはどの枝にも、実がついていない。それもそのはず、九千年めにみのる桃がいちばんうまいので、悟空が、そればかりとってたべてしまったからだ。

「おかしなことね」

「毛虫にでも、たべられてしまったのかしら。」

やっとのことで葉かげに一つみつけることができた。

ひとりの仙女がその実をとろうとして、悟空がねている枝を、力一ぱいひっぱったからたまらない、枝がゆらりとゆれて、悟空はころげおちそうになった。

「おっと、あぶない、なにをする。」

とびおりながら、すがたをあらわした悟空、

「こら、こら、さては桃をぬすみにきたな、斉天大聖がここに番をしているからには、ゆるしておかぬ。」

つづく

## 故高階禅師中央御本葬（宗門葬）の式礼

当山開祖平沼桐江先生御夫妻は、五月三日小雨ふりしきる東京駅に可睡斉（清水市）から御到着の、先生御夫妻が師父とし仰ぎ親しまれていた故高階禅師様の御霊骨を宗門の方々と共に迎へられ、港区の大本山永平寺別院に御安置申し上げられました。

翌五月四日御本葬の日は、前夜来の雨もあがり初夏をおもわせる五月晴で、早朝から永平寺別院で、新管長佐藤泰舜禅師の導師により御本葬が営まれました。

平沼桐江先生は、檀信徒総代として弔辞を捧げられましたが、弔辞御奉読の途中しばしば声もつまって、御追慕の念やみがたきご様子がよくうかがわれ聞くものの心を深く打ち、目がしらを押さへている檀信徒の姿が目につきました。

弔辞を奉読される桐江先生

その弔辞は次ぎの通りです。

### 弔　辞

勅賜大鑑道光禅師の御霊前に、信徒代表として弔辞を申上ぐる光栄に浴しました事は、奇しき因縁とは申し乍ら誠に恐懼の至りに存じます。

世界仏教界の最高峰であり、古今の大徳と仰がれた猊下が御遷化遊ばされてより已に百余日となりましたが、今だにあの御温顔が瞼に焼きついて居りまして追慕の念止みがたきものがあります事は私ばかりではないと存じます。

猊下には日本に数ヵ所建立された、玄奘三蔵法師霊骨塔の御導師や大船観音其他数知れぬ寺院の御指導を遊ばされ、又仏教的会合には必ず御出席なされ殊にブラジルを始め世界の国々に御巡錫なされて、仏教興隆のため席のあたたまる間もなき御努力には全く敬服の外ありません。

白雲山鳥居観音に対しても十数年にわたり、吾がことのように御懇切に御指導賜りました。

又世界仏教徒大会及びインド仏跡巡拝には、二回も

猊下のお供をさせて頂いた事等思ひ浮べ只々有難き仕合せであったと感謝感激致しております。

猊下が御遷化なさる迄、永い間禅悦会の方々と般若心経の御講話を拝聴いたしましたが、先日この会の方方が鳥居観音に参拝されて猊下の御足跡を追慕しお侍者の別所、中村御両師をかこみ思ひ出を語り合ひましたが、猊下が其処にいらっしやる様な錯覚を起しまして一同感無量でありました。

現在玄奘塔の下に建立中の支那門に玉華門と命名なされ、其の扁額の字を御揮毫して下さいましたのは昨年十二月末のおしつまった時で、其の御染筆はついに御絶筆となりました。

御納棺式の折、御参加なされた多くの方々が皆嗚咽しつつ読経して居られた、あの崇高な情景はお釈迦様が沙羅双樹のもとで弟子達や鳥獣に迄嘆き慕われて居られたお涅槃の有様を目のあたり見る様な謹厳な情景に胸せまるものがありまして、猊下はお釈迦様の再来であられるとよく云われていたのもうべなるかなと痛感いたしました。

今後私共信徒は、御生前の御教示に従ひ仏教興隆のために尽したいと存じますので、何卒涅槃場裡より御照鑑をあおぎますよう伏して御願ひ申し上げ、且つ御冥福を御祈り申し上げ謹んで弔辞といたします。

合　掌

昭和四十三年五月四日

信徒総代　平沼弥太郎

## 白雲山の紅葉

十月下旬になると、白雲山は生い茂る常緑の間に、三蔵塔を中心に、紅葉のいろどりが日一日とこくなってくる。澄み切った秋の空はどこまでも、透き通ってはてしもないのである。

ふもとの鳥居観音をゆっくりと詣でて、右へ行ったところに、鳥居文庫がある、その前を少し行くと左へ登山道がある、この辺り猛宗竹林で山は秋と云うのにここばかりはみどりこい竹の春である。真直に行けば、はにわ式の建物がある。そこでは野外料理ができるように炉がつくられて、そばには筧の水がおちている。

左に道を登るといく曲りかすると、仁王門の前の広場にたどりつく、そこから左後方の小高いところに、お堂があって中にお地蔵様が赤ん坊を抱いて座しているのが実にやさしくて、子の母は又これから母となろうとする者は心から拝されるのである。

仁王門には左右に巨大な仁王様が大きな足をふまえ

てにらんでいる。仁王門をくぐって尚も登れば、あたりの紅葉は木も古いのが点在していて一段と美しいところとなる、道の曲折も面白く、急坂になったところに、お堂がある、奥の院と云う、ここは岩場で松の木が多く、紅葉はすくないが、附近のいろどりに調和して、実によい眺めである。

つくばねうつぎが羽子をつけた実をたれていると思えば、どうだんの葉がいろづき初めているのもこの辺である。

北方に谷をへだてて、梢ごしに三蔵塔が秋空に高くくっきりと浮び、その辺一帯の紅葉が一極目立って見える。

ここから横道伝いになるが、このあたりから西川材を誇る杉檜の美林が秋空に向ってその梢を競うかのようにふり立てている。

この林の中にある下木もすでに紅葉をして、行く人の目をたのしませてくれる。

中でもむらさきしきぶの実のむらさきが珍らしく、男ようぞめの葉の紅葉や、数は少ないが赤い実がたれて風にゆれているあたり、誠に風情がある。

横道がつきたところに、大きな天然の石で橋がかけられていて、これを白雲橋と云う。

この橋を渡って短かいけれど急坂があって、その坂を登りきると三蔵塔前の広場につく、百八尺の三蔵塔が、碧空に優雅な姿で突立っているのにまず心をうたれ、しばらく我をわすれてたたずむのである。

## 秋の名栗観音センター

白雲山の秋が深まると、紅葉は日毎にいろどり、その山腹にそびえる白亜の三蔵塔は朝日夕日に映えて、一層その美しさを増してくる。

観世音センターは、十月から観音参拝がてら、紅葉の探勝の人人で毎日にぎわってくる。

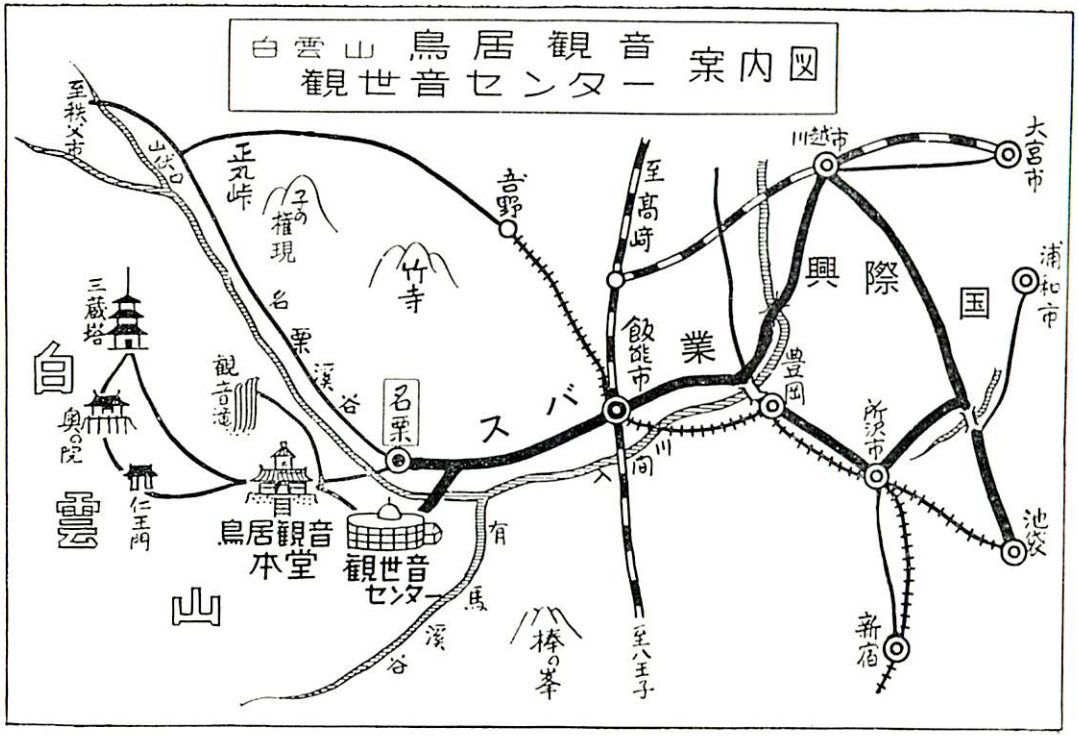
予約された団体は観光バスで、家族の場合は自家用車や、国際興業の定期バスで（飯能駅から三十分毎に発車）定刻にはおつきになれる。

その他フリーのお客様は自家用車で秩父、正丸峠方面を見て帰りに立よるとか、この反対のコースで立よる客で、予想以上の来客に多忙を極める時もある。とくに日曜や祭日はそれが多いので嬉しい悲鳴をあげるのである。

センターの入場は、午前九時から午后四時まで。

大人、百八拾円、小人、百円。（五才以上）

百名から二百九拾名まで百六拾円。


白雲山 鳥居観音
観世音センター 案内図
至秩父市
山伏
正丸峠
子の権現
竹寺
名栗渓谷
音野
至高崎
川越市
大宮市
浦和市
興
際
国
業
飯能市
豊岡
所沢市
スバ
名栗
川向
入
三蔵塔
白
奥の院
仁王門
雲
山
観音滝
鳥居観音本堂
観世音センター
有馬渓谷
棒の峯
至八王子
新宿
池袋

琴比羅神社
秋葉山
三蔵塔
面白岩
蛇の目傘四阿
観音滝
埴輪型四阿
本堂
梅暁之墓
梅月橋
鳥居文庫
名栗川